

同志社大学人文科学研究所第 9 研究会

人文科学研究所第 30 回 公開講演会 (1992 年 6 月 19 日 於 同志社大学田辺校地視聴
覚教室)

大航海時代のスペイン——コロンブスの思想と行動を中心に

立石博高

「最初のお断り」

ただいまご紹介にあずかりました、東京外国語大学の立石でございます。さて、まず初めにお断りをさせていただきます。じつは、今回の講演の依頼を受けたときに、演題を「大航海時代のスペイン」とさせていただき、さらに「拡大する帝国と閉鎖化する社会」という大きな副題を掲げました。しかしながら、原稿を準備するうちに、一時間という限られた時間にこうした大きなテーマをとり上げると、あまりに大ざっぱな話になってしまうのではと思うようになりました。また、いわゆる「スペイン・ブーム」のなかで、わが国で通説的に紹介されているコロンブス像があまりに一面的なものであるということに気がきました。そこで、今日の講演では、内容を絞らせていただこうと思います。布留川先生のご報告と合わせまして「コロンブスとその時代」が今日の全体のテーマであるところから、私のほうは、とくに「コロンブスの思想と行動」ということに焦点を合わせてお話しをさせていただきます。最後の部分でそれを補足するために、コロンブスの航海を実現させたスペインの時代状況というものを概括的に述べたいと思います。あらかじめお手元に配布したレジュメと内容が大きく異なることをどうかお許しください。では、始めさせていただきます。

「大航海時代のスペイン——コロンブスの思想と行動を中心に」

1492年8月3日、コロンブスを総指揮官とし、総勢90人を乗せたサンタ・マリア号、ニーニャ号、ピンタ号という三隻の船がスペイン南部の港パロスを出帆しました。それらは西に向かって航海し、やがて同じ年の10月12日、カリブ海のバハマ諸島の一つの島、おそらくはサン・サルバドル島に到着しました。この出来事は、近年までは一般に、「アメリカ発見」といわれてきたのに、最近では、「アメリカ到達」、「新大陸到達」というふう置き換えられていることに皆さんもお気づきのことと思います。また一部には、それを「アメリカ侵略」、「アメリカ略奪」、「インディオ大虐殺」という言葉に変えるべきだという意見のあることを、目にあるいは耳にされているかも知れません。

しかし、今日皆さんにお話しするのは直接にそうした論争についてではありません。「発

見」か「侵略」かという二項対立は、あまり意味があるとは思えないからです。というのも、当時のヨーロッパ人の立場からすれば、それが「発見」であり、先住民の側からすれば「侵略」であることは紛れもない事実です。ですが、本当に先住民の立場に立つということは、ただ単にヨーロッパ人の行動を告発・非難すればことが足りるということではないと思います。必要なのは、当時のヨーロッパ人が先住民社会を支配下に置き、先住民を事実上奴隷化するような行動をとることを可能とした歴史的諸条件は何であったのか、それらを個々、具体的に分析することだと思います。コロンブスは、どのような動機で「西廻り航海」を目指したのか、その実現を可能にした条件は何であったのか、彼はインディアスの土地を「領有」することを宣言したがそれはいかなる論拠にもとづくものであったのか、また、先住民の奴隷化を提案したがそれを正当化する論理は何であったのか。こうしたことを具体的に明らかにする必要があります。とくに、ある人間社会が他の人間社会を征服し、ある人間集団が別の人間集団を支配下に置く、さらに奴隷状態に置くということには、必ずそれを正当化するイデオロギー的基盤があったはずです。ですから、そうした行動の歴史的・思想的根拠を検証することは、現代の我々が異なる社会、異なる文化に対してどのようなかたちで接していったら良いのかを理解し認識するための材料となると思います。つまるところ、歴史学に現代的課題があるとするれば、それは、人々がどのような時代的制約のなかでいかなる行動をとったのか、あるいはとらなかったのかを検証していき、人間の精神と行動の限界性を可能性とを明らかにすることである、と私は考えています。

少し、前置きが長くなりましたが、以下、コロンブスの思想と行動の特質を検討し、コロンブスの西廻り航海、つまりインディアス事業（当時の言い方で）を可能にした歴史的諸状況について考えてみたいと思います。その前提としてまず、これまでコロンブス像が、どう描かれてきたかを簡単に振り返ってみましょう。

サルバドール・ベルナビウというスペインの歴史家は 100 年前、つまり、1892 年の「アメリカ発見」（当時、この言葉は疑問視されることはありませんでした）400 周年がどのように祝われたかということの研究した、大変に興味深い書物を著しています。そのなかで、彼は、19 世紀を通じて大きく分けて三つのコロンブス像が成立したことを当時の多くの出版物の検討から明らかにしています。一つは**神秘的コロンブス像**と呼べるようなものです。つまり、コロンブスは神の摂理、神意にもとづいて西方に航海したというもので、その事業はもっぱら「福音の伝え手」として理解されます。そして 19 世紀末には、カトリック

の聖職者のあいだからコロンブスを「列聖化」しようという動きさえ実際に起こりました。500周年にあたって、わが国で描かれているコロンブス像にはこの側面がまったくといってよいほど欠けていますが、実はコロンブスの西方への航海の動機、そして、彼の「新大陸」に対する認識の仕方を理解する上で、この側面が重要な意味をもっていることは後で述べます。もちろん、彼の航海に「神意」が働いたとここで主張しようというわけではありませんが。

第二のものは、**理想的・ロマン主義的コロンブス像**であります。ここでは、当時の無知蒙昧と闘い、夢を追い求める経験主義的・合理主義的コロンブスが描かれます。その最初の例は18世紀末に見いだされますが（ジョエル・バーローの長編叙事詩『コロンブスの幻想』など）、実は1792年の「アメリカ発見」300周年での建国まもないアメリカ合衆国の「現代的」要請とからんでいました。夢想家であり経験主義者であることは、実際のであり、目標を追求しようとするアングロアメリカ精神に即応するものであったからです。そして、1828年にワシントン・アーヴィングが著したコロンブス伝、『クリストファー・コロンブスの生涯と航海』は、我々が良く知っている多くの逸話を生み出しました。例えば、コロンブスの西廻り航海案を審議したサラマンカの諮問委員会で、頑迷な聖職者たちは地球が平らでないことを認めようとはせず、したがってコロンブスの航海案を否決したというものです。だが、これはまったく誤りで、当時、地球が丸いといことは常識的に認められており、コロンブスの計画に否定的結論が出されたのは、後に述べますように、それがあまりにずさんなものだったからです。にもかかわらず、こうした理想像は、「夢を追い求める」人々の心情やロマンと合致したためか、20世紀に入っても支配的なものであり続けています。その典型として、最近邦訳されたサミュエル・モリスンのコロンブス伝の結論部分を引用しましょう（『大航海者コロンブス——世界を変えた男』荒このみ訳、原書房、1992年）。「コロンブス生誕から500年以上が経ち、新世界の島を最初に発見した日が、南北アメリカ大陸のいたるところで祝われる今、コロンブスの名声は確立したと思われる。コロンブスにも欠点はあった。けれども、それはコロンブスの偉大なる資質にともなう欠点——不屈の精神、神を信じ、海の向こうの国々へキリスト教を伝える者としての使命感の並外れた強さ、無視されても、貧しくとも、くじかれても負けない執ような意思——だった。コロンブスの資質のなかでもとりわけ本質的なもの、きわだっているものには、欠点も暗い面もなかった——それは航海者の精神である。熟達した船乗りとして、コロンブスは同時代人のなかで突出していた。コロンブスが細心の注意を払って守り続けた

称号こそ、もっともふさわしいものであった。——アルミランテ・デル・マル・オセアノ、大洋の提督。」(同 276 頁) 皆さんのなかには、最近、日本企業の手で建造されたサンタ・マリア号(コロンブスの第一回航海のときの三隻のうちの主船)が神戸に到着したときに、新聞やテレビが、これと同じような調子でコロンブスの航海者の精神、その夢と冒険魂を称えていたことに気付かれた方もいらっしゃるでしょう。

しかし最近の記事には、手放しの称賛ではなく、「英雄」コロンブスも先住民には「征服者」であったといういくらかの留保が見られます。すでに 400 周年るときにも、コロンブスを非難する、あるいは蔑視する著述も出ておりました。この第三の**軽蔑的コロンブス像**は、富に貪欲なインディオ虐殺者としてコロンブスを描くわけですが、スペイン非難のいわゆる「黒い伝説」の継承ともいえるものでした。そこでは、アングロサクソンの植民者が行なったインディアン虐殺は疑問としませんでした。まして、今日、歴史学の課題とされているような、先住民や黒人奴隷の問題をとり上げて、人類史的に「ヨーロッパ近代」そのものを問うという視座はなかったということは言うまでもありません。

さて、コロンブスの思想と行動を、彼が置かれた時代的環境のなかで捉え直そうとすれば、実は、以上の三つのコロンブス像——神秘的コロンブス像、理想的コロンブス像、軽蔑的コロンブス像——は、それぞれが重なり合っていることに気がかされます。結論的な言い方を先にしますと、コロンブス——そして彼を取り巻いた人々——のなかには中世的な認識とルネサンス的な認識とが「矛盾」なく並存していたということです。つまり、抱いていた世界観は宗教的・神秘主義的なものであり、個々の世俗的行為は経験主義的・合理主義的でした。そうして、このいずれの面にも他者に対して優位に立つと自己意識化することになったキリスト教徒コロンブスは、非キリスト教世界の人々に対しては専横のかつ残虐的に振る舞う——人間が人間を奴隷とするということを含めて——ことができたのです。別の言い方をしますと、彼らは、庇護の聖母マリアの慈しみに深い感謝を捧げながら(実際に彼らは、わざわざエストレマドゥーラ地方のグアダルーペ修道院に赴いて、航海の無事をその聖母マリアに感謝した)、先住民インディオに対しては「野蛮な」行為を行っていたのでした。

まず、コロンブスが熟達した船乗りであったことは言うまでもありません。[*年表を参照してください。モリス前掲書に所収のものをコピーさせていただきました。] かつては、彼の出生については多くのことが言われてきました。ポルトガル人ともスペイン人とも主張されました。しかもスペインでは、エストレマドゥーラ地方のプラセンシア出身、ガリシ

ア出身、カタルーニャ出身という三つの説が生まれました。コロンブス英雄説と絡んでの郷土愛からでしょうが、現在では、公証人文書や訴訟文書の史料研究からジェノヴァの織物職人の子として生まれたということは間違いありません。なお、昔から通俗的なものとして、ユダヤ人説というものがありますが、これも歴史的信憑性があるとは言いがたいものです（わが国では「スペイン・ブーム」のなか、こうした類の書物が今年になって二冊も出ましたが）。そして15歳頃から船に乗り組んで地中海を航海し、後に航海日誌で乳香について述べている個所の言葉から、エーゲ海のキオス島にまで行っていることが分かります。1476年には、乗り組んでいたジェノヴァの商船隊がフランス武装船団の攻撃を受け、船が沈没してポルトガルのラゴスの町に上陸します。そこからジェノヴァ人居住区のあるリスボンに移ってからは、海図の制作を営む一方で、帆船に乗って大西洋を広く航海しています。例えば、1477年にはある商館に雇われて砂糖の買い付けのためにマデイラ諸島まで行っています。1479年にはマデイラ諸島のポルト・サント島の世襲総督の娘と結婚しますが、この間の事情については不明なことが多いようです。いずれにしろ、こうした海図制作や航海の経験を通じて、北大西洋卓越風つまり貿易風や潮流の流れに熟知するようになり、帆船を操作し船の位置を測定し海図を作るといった航海技術に非常に長けた人物になりました。こうした航海士としての優れた知識があったからこそ、彼は新大陸への航海を実に4回に渡って実現できたのでした。[*航海図を参照してください。ズヴィー・ドルネー『コロンブス——大航海の時代』上・下、日本放送出版協会、1992年、所収]そして彼の経験主義的な知識集成は素晴らしいもので、それは航海技術の面でいかに発揮されました。ちなみに、第1回航海ではカナリア諸島を発ってカリブ海に到達するのに36日かかりましたが、第2回ではわずか20日でした。

では彼の地理観は、どれほど正確だったのでしょうか。先ほど触れましたが、地球が丸いということはすでに当時の常識であって、東廻りではなく西廻りで行ってもインディアス、つまり当時考えられていた東アジア（そこには中国＝カタイ、日本＝ジパングつまりジパングも含まれていました）に到着できるだろうということは概ね考えられていたのです。もちろん、あくまでも世界が三つの大陸——アジア、アフリカ、ヨーロッパ——からなるということで、新世界アメリカの存在は想定されていません。[増田義郎氏作成の東アジア地図を参照してください。同著『コロンブス』岩波書店、1979年、所収] ちなみに、コロンブスがアメリカに到達した1492年に、マルティン・ベハイムは地球儀を作製していました。また、イタリアのトスカネリ（フィレンツェの外科医）も、1474年には、ジパ

ングがカナリア諸島から 3000 海里西にあるという海図をポルトガルのマルティンスに送っていました。通説では、このトスカネリとの交信がコロンブスに西廻り航海を確信させたとされていますが、どうも最近の研究では書簡の交換はなかったようです。ですから、彼の独自性は、蓄積された航海技術をもってして、大西洋を一挙に横断して東アジアに到達できるという強い確信と、その確信した計画を何度も王室に売り込み、それをあくまでも実行しようとする精神的執ようさにあったと言えるのです。

そこで、この確信なるものが問題となるのですが、それは一つには、彼が抱いていた不正確な地理観から生まれていました。細かいことは一切省略しますが、彼は古代ギリシアの地理学者プトレマイオスに則って地球を球体と考え、そこに横たわる陸地は、やはり古代以来の地理観にもとづいて（とくに、14 世紀後半から 15 世紀初めにかけて生きたフランスの枢機卿ピエル・ダイイの『イマゴ・ムンディ（世界像）』の影響を受けました）、ヨーロッパ、アフリカ、アジアからなるものと考えました。そして、西廻りでのイベリア半島とインディアスの距離を計算するのですが、アラビア・マイルとローマ・マイルを取り違えるなど、誤謬に誤謬を重ねて地球の大きさを実際の三分の二に推定してしまいました。結局、カナリア諸島とジパングとの距離も、トスカネリの推定をさらに縮小したわずか 2400 海里の行程となってしまいました（実際には 1 万 600 海里もあります）。これでは、当時の帆船でもどこにも寄港せずにたどり着くことが可能ということになります。この距離計算は、当時の「科学的」常識にあまりにも反していました。ですから、コロンブスの航海計画を審議したサラマンカのタラベラ諮問委員会もそれに否定的結論を下したのであ。ところが偶然にも (!)、ほぼこの距離のところに新大陸があったのですから、皮肉なものです。

さて、コロンブスに西廻り航海の確信を生み出したもう一つのものは、その精神的執ようさとも絡むことですが、アジアに対して彼が抱いていた大きな「期待」でした。彼の書簡、航海日誌、そしてとくに未完に終わった『予言の書』を読みますと、コロンブスがいかに強く終末論的・至福千年主義的観念に囚われていたかが分かります。この終末論というのは、聖書のなかのヨハネの「黙示録」に記されているものですが、この世にはいつかキリストの第二の復活があって、至福なる千年期が訪れる、その後は再び地上は混乱してやがて最後の審判を迎える、というものです。このキリストの再来、至福千年期の到来という願望は、ヨーロッパの中世末の宗教運動のなかに強く現われていました。そして『予言の書』の序文にあたる書簡（1501 年 9 月から翌年 3 月にかけて書かれたもの）でコロ

ンブスは、この世の終わりが創生の年より数えて第七千年期におこるという「聖なる神学者たち」の意見に同意して、「世界が終わる七千年に達するまでおよそ 155 年しか残されていない」と述べて、この世に福音を伝えることを急がなければならないと言っています。さらに、第四回航海のときにカトリック両王に宛てた書簡では、「エルサレムとシオン山は、神がその預言者の口から『詩篇』一四で宣言なさったようにキリスト教徒の手によって再建される」であろうが、「これを行なうべきものは、スペインからやってくるであろうとホアキン修道院長は言った」ということが書かれています。このホアキンとは 13 世紀に活躍したフィオレのヨアキムと呼ばれる人物で、彼の終末論思想はその後のフランシスコ会聖霊派の人々に大きな影響を与えています。聖霊派自体は 15 世紀半ばに弾圧されますが、その精神と終末論はフランシスコ会厳修派に受け継がれたとされます。後でまた述べますが、実はコロンブスは、このフランシスコ会厳修派と深い関係をもっていたのでした。コロンブスが聖フランチェスコにどれほど帰依していたかは、彼が航海から戻るとフランシスコ会士の着る粗末な服を身につけたということや、フランシスコ会第三会員（在俗会員）の修道服に身を包んで葬られたということからも分かります。

ですから、コロンブスは、ヨアキムの思想に強く影響されて黙示録的世界を構想していたのであり、「新しい修道士の集団」の一人として、聖地エルサレムを奪回するために「スペインからやってくる」事業に関わることが、まさに自分の使命であると思っていたのです。航海に出発する 1492 年 8 月 3 日の前夜に彼は、自分とカトリック両王の使命を次のように述べていました。「・・・私は両陛下に、インディアの地、ならびに彼らのロマンス語で諸王の王を意味するグラン・カンと呼ぶ君主についてご報告申し上げましたが、この王ならびにその先代たちはたびたびローマに人を派して、我らの聖なる教えを教示する博士を送られるようにと要請したにもかかわらず、教皇はこれを聴許されることがなかったのであります。・・・両陛下は、・・・この私、クリストバル・コロンを、インディアのさきに述べた地方へ派せられ、彼の地の君主や、人民や、さらにその土地、その模様を見聞きして、彼らを聖なる教えに帰依させることができるような方途を探求するようにと命ぜられ、そのためには従来から通ってきた東の陸地からではなく、今日まで人の通ったことがあるかどうか確かではない西方から赴くようにと仰せつけられました。」そして、航海日誌の記述から分かるのですが（1492 年 12 月 26 日付）、インディアの地またはインディアスによって得られるすべての収穫を彼はエルサレムの聖墓の回復のために使用することを建言していたのでした。そして、このときカトリック両王は、「これに対してお笑いに

なり、嬉しいことだと述べられて、それがなくても、征服は成し遂げたいと願っている旨仰せられました」と記しています。また、彼が作成させた遺書のなかでも、「我らの君主たる王と女王に、インディアスからあがる収入から、エルサレム征服の費用を出すべきことを決定されるよう請願しようとし、また実際に請願した」と述べています。

さて、コロンブスの第一回航海のときに主船サンタ・マリア号を提供し、自らも第一回、第二回の航海に参加したファン・デ・ラ・コサという人物は、その経験をもとに世界地図を製作しています（1500年の日付だが、実際は少し後のものとされる）。[*地図を参照してください。]これは、実に興味深いものです。アメリゴ・ヴェスプッチの四回の航海（1497年から1504年）をもとにマルティン・ヴァルトゼーミュラーが作製した世界地図で初めてアメリカ大陸は描かれます。それまでのものは、コロンブスの周航した西インド諸島の部分はかなり正確に描かれているのですが、あとの大陸に当たる部分は、左端まで広がっていてアジアとつながっていると想定されたままなのです。経験的に明らかにならない限りは、中世的地理観がなお強く存続していたわけなのです。さらに面白いのは、左端の中央部が、聖クリストファーの絵で覆われていることです。[*図を参照してください。]この聖人については、わが国では芥川龍之介の短編小説『きりしとほろ上人伝』でよく知られていますが、あの「世界の苦しみを身に負うた」キリストを担って荒れ狂った大河を無事に渡りきった大男です。そしてクリストファーは、コロンブスの洗礼名（スペイン語ではクリストバル）に当たるのです。コロンブスは最初に新大陸に到着して以後、クリスト・フェレンスという署名をしています。その意味は明白で、「キリストを担う者」ということです。まさに、コロンブスは、黙示録的世界のなかでの自分の役割を強く意識していたと言えるのです。[*1493年1月4日の書簡には図の署名が見られますが、彼がいつからこの署名を始めたかは定かではありません。]なお、.S.\S.A.S. は、「余は至高の救世主の僕なり」(Servus Sum Altissimi Salvatoris)で、X M Y は、それぞれキリスト、マリア、ヨセフのことであろうと推測されていますが、諸説があります。

ですから、彼が1492年10月12日にサン・サルバドル島に到着して以後、長い年月に渡ってカリブ海諸地域を周航しますが（全部で四回の航海）、そのなかで自分が東アジアの一部にいたことを疑いません。もちろん、世俗的願望はアジアの金の獲得ですから、そうした期待とも絡んで、さまざまに自分の置かれた地理的位置を推測します。マルコ・ポーロ『東方見聞録』からの知識にもとづいて、彼が「発見」したキューバ島やエスピノーラ島を当初ジパングではないかと思ったことは有名な話です。インディオがシバオと

いう地名を口にするとそれをすぐにシパンゴ（ジパング）と聞き取ってしまいました。だが、そうではないということが分かると、次に彼が頼れるのは聖書の世界に描かれた地理ということになってしまいます。例えば、第二回の航海で、ジャマイカを「列王記 I」にもでてくるシェバ（この女王がソロモン王を訪ねました）ではないかと考えますし、エスパニョーラ島の南西端の山もあの420タラントの金の取れたオフィルではないかと考えます。そして第三回の航海では、1498年7月31日に現在のベネズエラの対岸の島に達しこれをトリニダー（三位一体）島と名付けますが、その反対側に新しい大陸、つまり南アメリカ大陸が横たわっていることを認識できません。漠然と彼はこれを「オトロ・ムンド（別の世界）」と呼んだのですが、もちろん新世界と認識してのことではありません。結局、彼の思考は、再び聖書の世界に戻ります。つまり、「学識のある神学者たちが、地上の楽園は東方にあると認めている」と述べた上で、この湾で大河（オリノコ川）の淡水がたくさん海に流れ込んでいるのを証拠として、それは地上の楽園の泉から流れ出る四つの大河のひとつであると捉えてしまいます。ここを「パライソ・テレナル（地上の楽園）」への入り口であると判断したわけですから、そこで彼はそれまで抱いていた地理観の修正を迫られます。「私は今まで、世界は大地も海も含めて球形であると、書物で読んで参りましたし、またこのことは、プトレマイオスやその他の学者もまったく同じく、・・・権威をもって述べているところでもあります。しかし私は、この世界がいびつになっていることを発見したのであります。私は、この世界は今まで書かれているような円形ではなく、梨のようにヘタがついている個所が高くなっていることを除いては真ん丸い形であり、これを言い換えれば、それは丸い球のあるところに乳首を付けたような形であると考え・・・」という非常に奇抜なことを真面目に述べています。そしてコロンブスは、この乳首の個所、地上の楽園は、人間が探索できるものだとは思わないと述べて、この場を離れてしまいます。報告書には、「私は、このもっとも高いところまでは航海できるものとも、またそこまで登れるものとも思っておりません。と申しますのは、彼の地こそは地上の楽園であり、彼の地へは神の御意志による以外は誰も到達できないものと考えているのであります。」と記していました。このようにコロンブスは、中世的な聖書の世界に囚われ続けていたのです。

だが同時に、金と香料を獲得するというのもアジアへの航海に「期待」した大きな動機であったことからして、彼が地中海商人の世界に属していたことはいうまでもありません。ポルトガル、ジェノヴァ、スペインの商人たちは、15世紀中頃から積極的に大西洋に進出し、「奴隷狩り」に手を添っていました。一方、キリスト教君主に属さない島々は、キ

リスト教を布教するという目的で最初に発見したキリスト教君主が領有（ポセション）できるという「慣行」的理論も定着していきました。コロンブスが到着したサン・サルバドール島で最初に行なった儀式もカトリック両王のための「領有宣言」でした。そしてコロンブスは、発見した島々に金を探すわけですが、期待通りの金が発見されないことが明らかになると、やがてこれまでの地中海商人の行動に倣って、先住民インディオを奴隷化する方向に傾いていきます。

コロンブスは最初、カトリック両王が領有することになった島々の住民について、「彼らは武器を持っていませんし、それがどんな物かも知りません」と述べます。つまり、極めて従順で素朴な人間だと判断し、「彼らは利口で良き僕（セルビドール）となるであろう」と記しています（1492年10月）。コロンブスの目には宗教も文字も持たないと映った（実際には先住民独自のものがあつたのですが）、裸同然の人々は、「簡単にキリスト教徒になる」はずであろうとも記しています。しかし、次の第二回航海では、金が発見されず、インディアス事業から思い通りの収穫をあげることができなくなると、コロンブスは、両王に対して「人間の肉を食う（カリベ）インディオたち」の奴隷化を許可するように求めます（1494年2月）。そして、エスパニョーラ島のインディオたちが労役・酷使に耐えかねて反乱を起こすと、「国王への反逆」に対する刑という名目で彼らを奴隷としてしまい、本国へ送り込みます（1495年2月）。やがて、コロンブスはカトリック両王に対して、インディアス事業を本格的に奴隷貿易として行なうことを提唱します。その書簡は、1498年9月に書かれたものと推定されますが、あの「地上の楽園」を語ったほとんどすぐ後であったことに驚かされます。彼は言います。「聖なる三位一体（トリニダー）の御名をもって、当地から売れる限りの奴隷と、ブラジル材（赤色染料）を送り届けることが可能であります。・・・カスティーリャ、ポルトガル、アラゴン、イタリア、シチリアの諸国と、ポルトガル領の島々、アラゴン領の島々、またカナリア諸島におきましては多数の奴隷が消費されておりますが、私の考えますには、ギネア（西アフリカ）からは今日、以前ほど大勢の奴隷がもはや来なくなりました。たとえ運ばれてきた場合でも、両者を比較してみたところでは、彼ら黒人の奴隷の三人分で、これらのインディオの奴隷一人分の価値しかありません。・・・ただいま申しましたように、これらのインディオのことを考慮に入れますならば、あれらの黒人の奴隷などは一見するだけの価値もありません。」その後、現実には、インディオ人口が急減し（過酷な労働と天然痘などの蔓延によって、エスパニョーラ島では、当初50万人いたとされるアラワク族が数十年でほとんど全滅の状態になる）、逆にカリブ

海諸地域には労働力として黒人奴隷がもたらされることは、周知の事実であります。コロンビアの作家マヌエル・サバータが、「二つの世界の出会い」という 500 周年際のスローガンを批判して、アフリカ世界を含めた「三つの世界の出会い」として記念しなければならないと言っておりますが、事実はまさにその通りだと思います。

以上、簡単にまとめますと、コロンブスの新大陸到着の事業は、地中海商人の北アフリカ、西アフリカ、大西洋への商業活動の現実的拡大をその背景にもっていたのはもちろんですが、そうした拡大と密接に絡むかたちで、熱狂的な宗教的エネルギーによって支えられていたということを見無視することはできません。とりわけ、「新しい天と新しい地」（ヨハネ「黙示録」に記載）に福音を伝えるという終末論的使命がその精神的支えになったことは否定できません。コロンブスは、自分の事業を誇らしげに語っています（1500 年末の書簡）。「我らの主の創造したもうた新しい天と新しい地については、イザヤの口からすでに述べられ、かつ聖ヨハネがその黙示録にも記されているところではありますが、神は、私をその使者とされ、いずれの地に行くべきかをお示しになったのであります。」それだからこそ、「キリストを担う者」クリストファー・コロンブスは、一方で経験的合理主義的行動をとりながら、最後まで中世的キリスト教的地理観を払拭できずにその生涯を閉じることになったのだと言えましょう。

さて、ただ今触れましたコロンブスの書簡は、次のように続いています。「あらゆる者が誰もこれを信じませんでした、神は我らの女王にこれを理解する精神と偉大な勇気とをお与えになり、神の大切な、愛する娘としてこの女王を、そのすべての継承者とされたのであります。而して、私はこれらを、女王の御名において領有すべく旅立ったのであります。」つまり、カトリック両王、とりわけイサベル女王がコロンブスの事業の最大の庇護者だったことが分かります。このような極めて宗教的な熱情に動かされた、ある意味では、非現実的な西廻り航海計画が、なぜスペイン王室に受け入れられたのでしょうか。なぜ 1492 年という年に、スペインのカスティーリャ王国の支援でインディアス事業が行なわれたのでしょうか。しかも、コロンブスは、全部で四回もの航海を行なっているのです。それを説明するためには、この時期のスペインの時代状況について考えてみる必要があるわけですが、以下、大まかですが、それについて若干述べさせていただきます。

まず、経済的・商業的状况を考えてみましょう。〔*すでに布留川先生のお話にありましたので、あまり繰り返しません。〕すでにポルトガルは、15 世紀初めから大西洋の諸島を探検し、西アフリカの沿岸を着実に南下していました。1487 年には喜望峰を周航し、

1498年にはヴァスコ・ダ・ガマがインドに到着することはよく知られています。そして早くも1440年代には奴隷貿易に手を染めています。14～15世紀に国内の政治的混乱を経験したスペインのカスティーリャ王国も（当時スペインは、中央部のカスティーリャ王国、地中海側のアラゴン連合王国、北部の小国ナバーラ、そして南部イスラームのグラナダ王国に分かれていました）、これに遅れたものの15世紀後半には大西洋への進出と商業活動に積極的に関与し始めます。しかしこれに重要な役割を演じたのは、セビーリャを拠点としたイタリア商人、なかでもジェノヴァ商人でした。このジェノヴァ人が大西洋に向かうことに熱心だったのは、東方貿易でヴェネツィアとの競争に敗れたことと、15世紀後半にはオスマントルコ帝国の擡頭という地中海世界の状況変化があったためです。つまり、彼らは新たな経済活動の場を切り開く必要があったわけですから。1478年から1496年にかけてのカナリア諸島の征服とそれに続く植民は、インディアスでの征服と植民の実験場の性格をもつことになるわけですが、これにもジェノヴァ商人が大きく介在していたのでした。

もちろん、コロンブスはアンダルシアのジェノヴァ人社会と深い関係をもっていたわけですから。そして、この事実は、コロンブスの第一回の航海の資金の七割がジェノヴァ商人から出ていることも説明してくれます。またイベリアの商人たちのアフリカ進出の経験は、すでに述べましたが、期待通りの金や香料が見いだせないと分かると、先住民たちを奴隷商品として取引しようとするコロンブスの態度にもつながっているわけですから。ラス・カサスという同時代の聖職者が、スペイン人の征服・植民の事業を告発して、インディオを擁護したといいうことはよく知られていますが、彼は、コロンブスを次のように非難しています。「提督がこのような（インディオを奴隷にするという）盲目と墮落に陥ったのは、ポルトガル人たちがギネアでの事業のなかで、というよりは、むしろその真相を言えば、彼らの暴虐行為のなかで、過去から現在にわたって示し続けているお手本を、提督が習い覚え、その悪に感染した結果なのである。」（最近出版されました、ラス・カサス『裁かれるコロンブス』岩波書店、1992年所収、241頁）この言葉は、コロンブスの商人としての行動のあり方を実に的確に示していたのでした。ポルトガル人という言葉にジェノヴァ人やスペイン人も付け加える必要がありますが。なお、コロンブスが「聖なる三位一体」の名においてインディオの奴隷化を推し進めようとしたのに対して、ラス・カサスの方は、インディオに対するあらゆる強制を神の摂理、神意へのはなはだしい裏切りであるとして厳しく糾弾したのですから、それは当時にとっては、キリスト教徒によって行なわれていたインディアス植民の正当性を覆すことを意味しました。そしてラス・カサスの告発は神学

論争を引き起こしましたが、それがインディオ擁護のための現実的効果を生むことはほとんどありませんでした。

次に、この時期の聖職者たちの布教活動の高まりを考える必要があるでしょう。当時、伝道、布教活動が、大西洋諸島の征服や商業活動と密接に関わっていたことに注意しなければなりません。なかでも、フランシスコ会厳修派の修道士たちは、当時もっとも熱心に布教活動に携わっていました。「マルコの福音書」のなかに「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」とありますが、彼らはこの言葉に則って、自分たちが「聖霊の時代」の「新しい修道士の集団」であり、世界の人々に福音を伝えることを使命と考えていたからです（これもヨアキムの思想ですが、三位一体にもとづいて、この世界は、「父の時代」と「子の時代」を経て「聖霊の時代」にあたると捉えられていました）。征服・植民の行なわれたカナリア諸島の布教活動の中心になったのも彼らでした。また、1472年から1480年にかけてギネアに派遣された教皇特別使節も、厳修派のラ・ラビダ修道院の修道士に委託されたのでした。セビーリャを拠点としてモロッコ司教を勤めていたのも、フランシスコ会の修道士でした。そしてコロンブスは、インディアス航海計画のポルトガル王室への売り込みに失敗して、1485年にスペインにやってきましたが、最初に訪れたのが港町パロスにあるこのフランシスコ会厳修派のラ・ラビダ修道院だったのです。この修道士たちこそが、クリスト・フェレンスという「西廻り航海」の使命を理解し、彼の航海実現の精神的支えとなったばかりか、現実にもその実現の協力者ともなったのです。彼は、この修道院のおかげで、多くの有力者と知り合うことができました。とくにそこで、かつてイサベル女王の聴罪司祭であったフアン・ペレス修道士と知り合うことができたのは、決定的であったと言えます。パロスが第一回航海の出発港となったのも、ひとつにはこの背景があったからです。

こうして、コロンブスの航海は、商人と聖職者の支援を受けて実現したのです。ですが、最後に、とくにイサベル女王との関係を考えなければなりません。中世末には、終末論的・神秘主義的な宗教的感情が高まったことを述べました。ひとつにはルネサンスという現象に見られるようにヨーロッパ世界の自己意識の高揚と関係があるわけですが、それが、地中海におけるオスマントルコ帝国の興隆と対峙するなかで生じたものである、つまり非キリスト教世界との対抗という状況から生み出されたものであることに注目すべきでしょう。だが、カスティーリャ王室が、航海計画に対する諮問委員会の否定的結論にもかかわらず、1492年4月にコロンブスとサンタ・フェの協約を締結するに至った経過を理解するには、

やはりカトリック両王、とくにイサベル女王の宗教的熱情を考えなければなりません。

イサベルが信心深い女王であったことは、歴史家たちのあまねく認めるところです。彼女もまた、コロンブスと同様にフランシスコ会第三会員であったと言われます。その聴罪司祭にはやはりフランシスコ会厳修派の者がなっていました。そして重要なことは、カスティーリャ王国の社会的統合と拡大がキリスト教による宗教的統一というかたちで進行していったことです。地中海に覇を唱えるオスマン帝国の脅威がある以上、イベリア半島にイスラーム勢力が存在することを放置するわけにはいきません。イサベルは 1474 年に即位したのですが、王権を安泰にするにはおよそ 5 年の内乱が必要でした。ですから、貴族たちの関心とエネルギーを最終的なレコンキスタ（国土回復運動）へと向けさせる政略上の意味もあり、1481 年にはイスラームの最後の砦グラナダ王国の攻略を開始します（この点では、あのマキアヴェッリに称賛されたフェルナンドの巧みな政略でもありました）。結局、アルハンブラ宮殿がキリスト教徒の手中に落ちたのは 1492 年 1 月 2 日でした。一方、かつてカスティーリャの豊かな文化を生み出したユダヤ人は、ことに 1391 年のポグロム（虐殺）以後に多くの者がキリスト教に改宗していましたが（彼らはコンベルソと呼ばれました）、一部は高位聖職者になるほどの熱心なキリスト教徒となり、一部は逆に隠れユダヤ教徒であり続けました。14～15 世紀の政治的・社会的混乱のなかで、社会的少数者（マイノリティー）のユダヤ人たちはいずれの理由にしろ目立つ存在であり、彼らはたびたび民衆の社会的不満のはけ口とされていました。ですから、1480 年には隠れユダヤ教徒を取り締まるために異端審問所が創設されますが、それにはキリスト教社会へ積極的に同化したコンベルソのあずかるところも大きかったのです。そして 1492 年 3 月 31 日には、7 月末の期限をもってユダヤ教徒がキリスト教への改宗か国外退去かの二者択一を迫られます。

要するに、この時代のスペインは、ヨーロッパの「キリスト教世界」への完全な同化を目指しており、国内的には、かつて多様な文化を生み出した異質な宗教——ユダヤ教やイスラーム教——を排除することによってひとつの宗教的統一を果たそうとしていたのです。そして、このエネルギーが外部世界へと向けられたとき、それは「福音の伝え手」というかたちで、「新しい天と新しい地」への航海となったのです。聖職者たちの伝道の使命と征服者たちの世俗的利害とが交錯しながら結局は一体のものとなって、スペイン帝国は拡大を続けます。しかし、スペイン王国のカスティーリャ社会のあり方はどうなっていったのでしょうか。ユダヤ人やモーロ人に対してキリスト教への強制改宗を迫ることによっ

て表面的には「キリスト教的一体化」が実現します。しかし、実は依然としてキリスト教社会に同化できないマイノリティーを抱え込んでいたのであり、中世を通じて社会に根を下ろしたイスラームとユダヤの文化はすぐに払拭できるものではありません。スペイン人は、ユダヤ人をマラーノ（豚の意）として軽蔑したのですが、他のヨーロッパ諸国の人々は、逆にスペイン人をマラーノとして見下していました。現在の我々には当時のスペインは非常なカトリックの国であるというイメージが強いのですが、実は15世紀から16世紀にかけての外国の目から見てそうではなかったのです。例えば、16世紀初めに活躍したオランダ生まれの国際的名声を得た人文主義者エラスムスは、スペインのシスネーロス枢機卿がこの国にやってきて多国語訳聖書の編纂に協力してくれるように要請したとき、スペインがキリスト教世界の辺境にある国で、セムの要素が非常に強いという旨のことを述べてこれを断ってしまいました。そして1600年の段階でも、異端審問長官ゲバーラは、「通俗的にはスペイン人を侮辱しようとするとき、彼らをマラーノと呼んでいる」という事実を記しています。したがって、スペイン人の方は逆にますます自分たちのカトリックによる「キリスト教的一体性」ということにこだわります。そしてこうしたキリスト教的統一の代償として、スペインのカスティーリャ社会においては、人々は自分たちの血がユダヤ人やモーロ人の血に汚されていないということ、つまり、血の純潔（リンピエサ・デ・サングレ）であること、旧くからのキリスト教徒であることを、その後数世紀にも渡って「強迫観念」として抱き続けることになってしまいます。

たしかに大航海時代にスペインは、外部的には大きく拡大していきました。しかし同時に、国内的にはその社会がますます排他的で閉鎖的なものになっていきました。コロンブスに始まるインディアスの征服と植民は、スペインに金銀をもたらし（とくにポトシの銀）、16世紀スペインの「国際的優位」を支え、スペインが対抗宗教改革の旗頭となることを可能にしました。しかし、そうした優越のゆえにスペインは、国内的には排他的カトリックの古い価値観を持ち続けることになり、ヨーロッパ諸国のなかで、近代社会の形成において大きく遅れをとることになってしまったのでした。

ご静聴ありがとうございました。